

# 「しる・わかる」

沖 裕子

## 1.はじめに

「しる・わかる」は、分類語彙表では「思考・認識・知解」に分類され、ともに、知覚に關係した行為・作用を表わす動詞である。

「思考・認識・知解」というタイトルからわかるように、「しる・わかる」の内容は一義的ではなく、認識から知解のところまでまたがっている。そのまたがり方は「しる」と「わかる」では少しずつ違い、別々の意味の特徴をみせている。

本稿では、「しる」と「わかる」を分析して、それぞれの意義素と意味的な特徴を考察したい。

## 2.「しる・わかる」

### 2.1.「しる・わかる」～主格をめぐって～

「しる」は「～を・しる」、わかるは「～が・わかる」という文型で対象格をとる。

(1) 彼の 住所を しる

(2) 彼の 住所が わかる

この形をみる限りでは表面化してこないが、次のように主格をとった文の中では、(3)の表現は完全に自然であるとはいえないように思える。ここで主格というのは、「知覚する主体を表わす名詞+助詞」の意で使う。

(3)? 私は 彼の 住所を しる。

(4) 私は 彼の 住所が わかる。

CE (5) 私に 彼の 住所が わかる。

(3)の表現はま、たく使えないというわけではなく、文体的な理由などによっては文章中で使われることがある。しかし、

少なくとも自然発語ではあまりお目にかからない文であるといえよう。

一方、次のように「した」という形になれば文はごく自然である。

(6) 私は 彼の 住所を した。

そこで、例文として意味を分析していくためには双方が自然に感じられるような表現、「した」「わかった」の文型を使いたい。以下、両語の比較分析に入ろう。

## 2.2.

(7) 中田博士は 実験によって ある法則を した。

(8) × 中田博士は 実験によって ある法則を わかった。

(9) ? 中田博士は 実験によって ある法則が わかった。

(10) 太郎くんは 実験によ、て オームの法則が わかった。

(11) 中田博士による 実験によ、て ある法則が わかった。

(12) 実験によ、て ある法則が わかった。

(13) 実験によ、て ある法則を した。

(7)(13)は「しる」の文、(8)から(12)は「わかる」の文である。

(7)から(11)は主格をとった文で、(12)(13)は主格をとっていない文である。

ここでは、「しる」「わかる」の文中における主格の表われ方を問題にしたい。

さて、(7)は普通に言われる文である。ところが(9)と(11)のは、間違いではなくても少々すわりの悪い感じを与えるがどうだろうか。(9)より、(11)の方が自然である。

しかし、(11)は「中田博士は・わかる」ということより「ある法則が・わかる」というところに主眼がおかれていて、「中田博士」は主格ではない。その意味で、(11)は、(9)よりも(12)の文に通じていると思われる。

(12)は「ある法則が・わかる」という文で、主格をとっていない。

ない。ところがこの表現では主格をとっていなくても意味が通る。(12)はそれだけで「世の中に」あるいは「巷に」「わかる」という意味をもつ。「世の中」や「巷」は知覚する主体ではなく、まして知覚する能力も意志も持っていない。

さて、「しる」の方に視点を移して、(17)と(13)をみてみよう。(17)は「中田博士は・ある法則を・しる」という構成で主格をとっているが、(13)は「ある法則を・しる」という構成で、主格が表現されていない。ところで「わかる」の場合は、「ある法則が・わかる」というぐあいに主格をとっていなくてもそれなりの意味があ、たのに対して、(13)はこれだけでは完全な意味は伝えない。(13)が文章の文脈の中で生きてくるには、必ず「誰が」という主格を補って読みこまなければならない。つまり「しる」は、主体の明確な存在を要求する文表現であるといえる。逆にいえば、文脈の中で主体が明確に規定できるような場合でなければ略されにくいということになるだろう。

主体は必ずしも個人だけではなく、集団でもよい。知覚する主体として認定できるものであればよく、「しる」が主体と結びついた行為であるという点が肝心な点である。そこで、

(14) 石ころは 道端に咲いた花を しった。

という表現でも、前後の文脈で「石ころ」が知覚をもった物体であるという前提があれば、認定できる文になる。この点は「わかる」も同様で、主格をとる文では、そこには知覚をもつと認められた物体がたつ。

また、集団が主格にたつた文には次のようなものがある。

(15) あるクラスは 実験によつて オームの法則を しった。

(16) 日本人は、ザビエルによつて 鉄砲を しった。

(17) 人間は その昔 火を しった。

さて、そこで、立ちもどって「しる」と「わかる」を考え

てみると、「しる」はく知覚する主体の明確な存在を要求する>、「わかる」はく必ずしも知覚する主体の存在を要求しない>というところに、それを此の語の意味的な本質が隠されているとはいえないだろうか。

ここから導き出されるのは

「しる」:《主体が対象を知覚にとらえる。》

「わかる」:《対象の実態が明らかにとらえられてくる。》

という意義素である。

両語とも知覚に関係した作用・行為であるが、「しる」は「主体がとらえる」というところに力点があるのに対し、「わかる」はむしろ対象の方に力点がおかれていて、「実態が明らかになる」点が大切にされている。

よって、「(12)実験によってある法則がわかった」というように、主体が誰であることを特別に述べないときは、その法則が「人間に明らかになった」という意味をなす。というよりも、その意味の時は、主格をとらないで表現される。

### 2.3. 「わかる」

「わかる」は、対象が明らかになることに力点がおかれく必ずしも知覚する主体の存在を要求しない。》と述べたが、「わかる」のすべてについて、知覚する主体が要求されないわけではないことに言及しておこう。先に、(9)の文は少々すわりが悪いと述べたが、それがどのようなことからそう感じられるのかを探ることによって考えてみたい。

(9)の「ある法則」を「アインシュタインの相対性理論にかえてみよう。(ただし、相対性理論は実験によって確かめることはできないから、その部分はかえる。)

(9) 中田博士は 実験によって ある法則が わか、た。

(18) 中田博士は 厳しい勉強によって アインシュタインの相対性理論が わか、た。

(10)から受けとる意味は「(10)太郎くんは実験によ、てオームの法則がわかつた」と似てくる。文のすわりもよく、意味が伝わる文であるといえよう。

「ある法則」というところにヒントがあると思われる。

「ある法則」というのは、「その時まで知られていながら、た法則・その時はじめで発見された法則」であると察しがつく。いわば、未知の法則である。それに対して、「アインシュタインの相対性理論」「オームの法則」というのは既知である。

(12) 実験によ、て ある法則が わかつた。

(13) 中田博士による 実験によ、て ある法則が わかつた。

(12)(13)のような文では、対象が<sup>じんげん</sup>人間に明らかにされる。>というところに「わかる」の中心的意味がある。対象を未知から既知にかえるという点では意味的には「しる」と近い。

ところが、「主体・アインシュタインの相対性理論がわかる」「主体・オームの法則がわかる」では、<対象が人間に明らかにされる。>という意味的特徴だけでは文意は伝わってこない。

ただし、この場合に、ある限定された主体にとってはどうだろうか。特定の主体にとっては、対象の実態は「未だ明らかにされていない」のではないか。(これを考えると、「主体が対象を理解する」意でも主体を場所的にとらえて、「〜にわかる」という格をとることがうなづけてくる。が、ここではこの問題は特に検討の対象にはしない。)

(14) アインシュタインの 相対性理論が わかつた。

(14)の文では「アインシュタインが相対性理論を発見した」ということをいうのではない限り、「誰が」という主体が重要で、特定の主体を読みこんでみないと、文脈の中では生きてこない文だということに気がつく。そこで、(10)(13)のような、対象の存在が既知であるものについては、<主体にと、て対象

の実態が明らかにされる>という意味的な特徴が発現されたものといえる。こちらは、特定の主体を要求する点で「しる」と似ている。

以上のことから、(9)の文のすわりの悪さは次のように説明できるかと思う。

(9)の文では、「ある法則」が、我々にとって未知とも既知ともつかないことが始まりである。

未知だとすれば、(9)は<対象が人間<sup>じんかん</sup>に明らかになる。>という意味的特徴が生きて、「ある法則が・わかる」と読みこめる。しかしこのような場合、ほとんども主格はとらないところを「中田博士は」という特定の個人である主格をとっているため、おちつかないのである。一方、既知だとすれば、<対象の実態が主体にとって明らかになる>という意味的特徴が生きて「中田博士は・わかる」と読みこめる。ところが「ある法則が・わかる」という連語が邪魔をして「主体・わかる」が容易につなげられないために、明確な意味が生じにくい。前者・後者いずれともつかないところに、すわりの悪さが生じ「？」のつく原因がある。

「わかる」には、これまであげた用法とは少し異なると思われるものに、次のような例がある。

(20) 人ごみの中でも 多衣子さんは 真砂子さんの姿が わかった。

(21) 多衣子さんは 自分の靴が わかった。

これらの例では、多衣子さんはあらかじめ真砂子さんをして知っているし、もちろん自分の靴をしらないということはない。これは、主体のしている特徴から、対象を他のものとは区別して認めるという意味である。<対象が他と区別されて明らかになる。>という意味的特徴を考えるとよいかと思われる。

## 2.4. 「しる」

- (1) 中田博士は 実験によって ある法則を しった。  
という用法を先に例に出したが、次のような例とも合わせて考えてみたい。
- (2) 今度のことで 私は 己を しった。  
(3) 私は 書道の 真髓を しった。

(1)の「ある法則」とは、それを前提で論じてきたように「我々にとって未知の法則」である。したがって、中田博士にとってその時点では未知であることを確認しておきたい。

では、(3)の文例がとる対象の性質はいかがであろうか。「書道の真髓」がそれであるが、これは「我々」にとっては未知ではない。また、「何である」とはいえなくても、それらしきものが存在することは「私」という主体もわかっている。「真髓をしる」人はいるかもしれないが、ただ「私」という主体にはそれが未知であるために「しる」が使えるのである。特定の主体の作用・行為として「私は・真髓を・しる」ということが可能になる。

〈主体を明確に求める〉この強さが、「しる」と「わかる」の意義素を分けてきた根拠であった。ここで、今述べたところからもう一度「しる」の意義素を考えてみると、

「しる」：「主体が、主体にとって未知であった対象を知覚する。」

というところにいきつく。

さて、(1)と(2)(3)であるが、対象の性質は大分違っている。(1)がとる対象の性格は「知識の存在」であるが、(2)(3)では「その内容や質、価値」である。

「しる」には、その他にも以下にあげるような用例があり、その対象の性格の幅が広く、その結果文意はバラエティーに

留んだものとなっている。

(24) 私は 前の家の 火事を した。

( 事実・存在をとらえる。)

(25) 私は 世の中を している。

( 内容・意味をとらえる。)

(26) 私は 中国語を している。

( 理解して、体得する。)

(27) 若者は 旅をして 世界を した。

( 経験する。)

(28) お隣の 田中さんなら しています。

( 面識がある。)

「しる」は、「主体が知覚する」ということが中心的意味であった。(p.126) 知覚とは、「感覚器官を通じて、外界の事物を見分け、とらえる働き」である。それには、視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚など、様々な感覚器官が参与する。同じく知覚することについての表現でも、「しる」は「わかる」に比べて「主体が」という点が意識されたため、主体の動員する感覚器官の別によって、その意味が「存在をみとめる」ことから「内容・意味をとらえる」、さらに「理解して体得する」「経験する」にまで広がったのだと思われる。

「しる」が対象格にとる対象の性質によつて、文意がさまざまにかわるから、「わかる」のように意味的特徴として大きくつかむことがしにくい。

また、対象格にとる対象の差が文意を異なるものにするのが、それとも「しる」という動詞自身の意味の差が対象格にとる対象を選ぶのかはよくわからない。

しかし、たとえば文法上の特徴からみれば次のようなことはいえよう。

(24)のような、「主体が単に対象の存在をとらえる」というと



きは、

(29) ×私は 前の家の 火事を しりたい。

とはいえない。それ以外なら、たとえば〈内容・意味等をさ  
とる〉という(25)の表現では、

(30) 私は 世の中を しりたい。

ということがいえる。

対象の性格が事実や存在である時は、主体はそれらを見と  
めるだけである。その場合、主体の意識ではその対象をしら  
ない状態かしている状態かしかないから、「しる」という  
行為・作用は瞬時的なものであり、主体が対象との出合いを  
あらかじめ開知する、というようなことはない。それに対し  
て、それ以外の意味では、「わかる」の意味的側面に似て対  
象の内容等々が問題にされるので、たとえば「世の中」とい  
うような存在自体はあらかじめ主体がとらえていなければ、  
その内容等々まで「しる」ことはできない。

以上の考察から、本稿では、「しる」がさまじく旨の文意を  
示すことをゆききえた上で、次のような意味的特徴を考えて  
おきたい。

〈主体が、主体にと、て未知であった事実や存在を意識に  
とらえる〉

〈主体が、主体の意識にある事柄の実態を知覚する〉

## 2.5. まとめ

以上の考察を次のようにまとめたい。

「しる・わかる」は、知覚することを表現している点で、  
同一の意味分野を形成する。

「しる」は〈明確な主体の存在を要求する〉、「わかる」  
は〈必ずしも知覚する主体の存在を要求しない〉というところ  
から、次のような意義素が考えられる。

「しる」:《主体が、主体にとって未知であった対象を知覚する。》

「わかる」:《対象の実態が明らかにとらえられてくる。》

「知覚する」とは、「感覚器官を通じて、外界の事物を見分け、とらえる働き」の意味で使うものである。

「しる」は大きく次のような意味的特徴をもつと思われる。  
《主体が、主体にとって未知であった事実や存在を意識にとらえる。》

《主体が、主体の意識にある事柄の実態を知覚する。》

これらは、語にあてはめられて一義的な意味となるような性質のものではない。「しる」は、さらに、対象格にとる対象の性格とのかねあいで、様々な文意を発現する。

「わかる」は、大きく次のような意味的特徴をもつと思われる。

《対象が人間に明らかになる。》

《主体にとって対象の実態が明らかになる。》

《対象が他と区別されて明らかになる。》

これらもまた、語にあてはめられて一義的な意味となるようなものではなく、これらの特徴のいくらかずつを兼ねこなえながら、実際の発話のときの語の意味はくみとれる。

## 書 志すび

以上で、この時点でできる分析を終えたい。文法的特徴に言及することが少なかっただが、文型が異なるこの二語では、この紙面と私の能力では少々寺に余るところであつた。文法的側面からの意味の追求は、責任をもってなされなければならぬポイントのひとつと心得る。

最後に、ゼミを指導して下さいました中本正智先生、御教示し

ただいたゼミの出席者の仲間に御礼申しあげる。

### 参考文献

- 国立国語研究所『分類語彙表』1964 秀英出版  
森田良行『基礎日本語』1977 角川書店  
牧野成一「分かる、知る、とunderstand, knowについて」『英語教育』1973 大修館  
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫『岩波国語辞典第2版』1971 岩波書店  
新村出『広辞苑 第2版』1969 岩波書店  
日本大辞典刊行会『日本国語大辞典』1972-76 小学館  
文化庁『外国人のための基本語用例辞典 第2版』1975 大蔵省印刷局

なお、1976年度 東京女子大学国語学特殊講義B、水谷静夫先生の講義、「言語で何を知りうるか」を参考にさせていただいた。

言語経歴：1955年1月、長野県佐久に生まれる。0才～1才まで小海町。  
1才～18才 松本市。18才～ 東京都巴内在住。